

第二十章 奉天の夜はふけて

奉天のホテルの会議室では日本人乗客の男性を対象に満州国の役割と関東軍の活躍や開拓民の成功談などの説明会が行われていた。十八歳以上を対象としていたので武尊君は行けなかったが、元海軍予科練習生だったアンニンから教わった勉強やトレーニングをしていた。

「君なら絶対戦闘機に乗れるよ。」
とアンニンに太鼓判を押されていた武尊君だった。太鼓腹でなくてよかったと思った。

同じ頃、ホテルの大広間では女性たちの食事会が行われていた。元々この日の夕食は男女分かれての予定だったのだが、かおり姫が満鉄の屋島君に宴会場の使用時間の延長をねじ込み、とろろん娘から国防女性たちの会議と聞いた舞子売・中佐が

「わしのおごりじゃ！飲んで食つてくれ！」
と、甘粕正彦を散々ドツキ回して満州映画協会に特別料理と歌謡ショー、そして会場費用を出させたのであった。

女装の男性。かおり姫の荷物持ちの満湖は饅頭ふたつと臭豆腐(チョウドウフ)を与えられて部屋で待機することになった。

中国の箸は菜箸のような長い箸で先がとがっていないので慣れないと使いにくい。また、箸置きが日本のように手前に横に置くのではなく、右端に立てに置くので、箸置きたびに困惑する童話作家のナオコさんだった。

スーパ―銭湯を営んでいる高木のお母さんことリヨンさんは、御主人が男性たちの勉強会に行ってしまったので少し元気がなかった。

「夫なんていれば厄介だけど、いないと張り合いがない物ね。」
夫を亡くしているナオコさんは高木のお母さんに声をかけた。

「え？そんなふうに見えましたか？ほかにもご夫婦でいらしている方がもいるのに、私だけそんなふうに見えたのかな？」

龍笛さんはいつもと変わらず平然としており、男前のカオリさんは子供たちの世話に追われているのかな？と思ったら、男前のカオリさんは。パッパラおぼさんとかおり姫のテーブルに押しかけて大いに盛り上がっていた。新婚旅行のヒデブ妻だけが暗くくうつむいていた。

「ありゃあ、重症だわ。」
ナオコさんとリヨンさんは各テーブルを観察しながら批評解説をした。

女子会会場では男前家のタカシ君と弟君、麒麟児家のみいちゃんが会場内を飛び回っていた。会場の裏で見つけてきた箒にまたがって撃墜王ごっこをしていた。

どうしても年下の弟君はお兄ちゃんたちのスピードについていけないので撃墜されてしまう。よし！軽量化のためにおむつを脱ぐぞ！ともぞもぞしているのを見たリヨンさんは弟君を呼び寄せた。

「フリチン君、日本の男はおむつをピシッと締めて戦うものよ。」

と、言いながら、長い中国箸をフリフリと振って

「今魔法をかけたからもう大丈夫だよ。」

と、弟君を送り出した。弟君はまた箒にまたがりタカシ君を追いかけると、リヨンさんにもらった箒を振ってタカシ君を撃墜した。

「無邪気なものねえ。」

と、ナオコさんを見ると、ナオコさんは何かを忙しそうにメモしていた。

新しい子供向けの小説の構想がひらめいたナオコさんは、思いついたことを次々とメモに書き込んで行った。

魔法使いの全寮制の学校に入る子供たち、小さな三人が力を合わせて悪い魔法使いと闘いながら成長していく物語を思いついたのだ。

「ピーマンと細切り肉の炒め物で青椒肉絲と言います。」

日本人のウェイターが円卓に出来立ての熱い料理を持ってきた。料理を持ってきたウェイターの名札には「堀田」と姓が書かれていた。

ナオコさんは近所を散歩した時に目に入った家の表札のことをふと思い出した。その表札には「針井」と書かれていた。

「そうだ！針井堀太にしよう！」

こうして世界の子供に勇気を説いたあのベストセラー、「針井堀太」が誕生するのであった。

その頃、高木のお母さんが心配している高木のお父さんたち男性陣の勉強会では、舞子売中佐が熱弁を振るっていた。

「いいですか皆さん。わしのおごりじゃ！飲んでくれ！食ってくれえ！」

これも満州映画協会の予算であった。

「あなたが陸軍一式戦闘機の設計に携わったフルカワ先生でしたか！お会いしようございしました。先生のようなご著名な方と出会えて感激しております。」

例によって舞子売中佐は酒を振る舞いに回った席でフルカワ先生に挨拶をした。

「あれ？フルカワ先生はどこで見かけましたな。警護兵！売りマンを持ってこい。」

舞子売中佐が警護の兵隊に命じて取りに行かせた嫁売満州新聞は「売りマン」と呼ばれていた。皆様のご想像とは異なりますので悪しからず。

この頃、奉天では連続少女誘拐事件が起きており、猟奇的犯人が逮捕されたばかりだった。その犯人の写真がフルカワ先生に似ていた。

「なあ、似てるだろ！フルカワ先生はこの犯人とそっくりじゃ！」

と、フルカワ先生の襟首をつかんで、各テーブルを回って新聞の写真と見比べさせ、酒をふるまう舞子売中佐であった。

高木のお父さんもリヨンさんと離されたことで元気がなかった。

「お元気がないようで、何かありましたか？」

龍笛ハズバンドが高木のお父さんのグラスにビールを注ぐと、

「奥様と離れ離れになったので寂しいみたいですよ。」

と、男前家ハズバンドが料理を取り分けて高木のお父さんに手渡した。

「男同士の集まり、気楽に過ごそうじゃありませんか。」

「我が家は妻が女子会。息子は部屋で特訓中。娘は獄門島。現在一家離散状態ですよ。女子会で妻たちが息抜きしているのだから、こちらも男の話題で息抜きしましょう。」

と、ロシアのコマンドサンボやフランスのサファード(サバット)など各国軍隊の武術について語

る軍事師範だった。

シヨウ・チャンツーは勉強会には参加せず、単身奉天の街中を歩いていた。ホテルに近いとある建物に入り次の仕事の準備を極秘に始めていた。この仕事はシヨウ・チャンツーの手腕に成功の力が握られていたのだった。

風魔忍者のマチ姐さんと飛騨忍者のミサオちゃんは女子会に参加していた。昼間、奉天故宮の鳳凰楼の前で写した記念写真の中から、スターキーさんが「要注意」の二人を発見し、シヨウ・チャンツーを通じて二人に監視・抹殺の指示が出ていた。

一人は見るからに正気ではない目つきをしたチバーバと呼ばれる婆さんで、もう一人は首振りデンデン太鼓のように、ピクピクと首を痙攣するチック症を患った小宮山と言う女。どちらもコミンテルンの息がかかった活動家だった。

清美、シオリ、蓮舫を背後で操っていたのはこいつらではないか？と疑念があったが、様子を見る限りむしろそれに寄生して生きているような頭のレベルだった。生きのいい三人が消えたことで、自分たちがまた表舞台に立っているのではなからうか？と画策している様子があった。この二人の円卓にマチ姐さんとミサオちゃんが座って観察していた。

マチ姐さんが「女性の権利」を話題にしたらこの二人が食らいついてきたので、ミサオちゃんがその隙にこいつらの部屋に忍び込んで調査をしたら、この二人がスターリンのシンパだと言ったことが判明した。

ミサオちゃんはそれぞれのカバンにスターリン同志からの指令 by KGB と偽った手紙を入れ、チバーバには小宮山が、小宮山にはチバーバがブルジョワ側のスパイだから抹殺せよ！と命じ、ついでに陰湿な相手の悪口をこれでもかと思き添えておいた。そして、毒殺用にフグの毒のであるテトロドトキシンの粉薬を封筒に入れた。

この時ミサオちゃんはロシア語がわからなかったたので、日本語で手紙を書いたしまったが、チバーバも小宮山もロシア語はわからなかったし、基本的にお馬鹿であるからそのまま信じてしまった。

ミサオちゃんは女子会会場のステージで恋ダンスを踊りながら、こいつらの正体と仕掛けた工作を忍び指文字でマチ姐さんに伝えた。状況を理解したマチ姐さんは、お互いが反目し合うように話題を仕向けるのだった。

「ふうふうして食べようね。はい。あくんして。に、してもこの子やったら重い。」

遊び疲れた男前家の弟君は龍笛さんの膝の上に乗ってシユウマイを食べさせてもらっていた。

「このくらの頃が一番かわいかったよねえ。手はかかったけど。」

と、ほおでえ看護師が言うのと、

「うちなんか、今でも手がかかっていますよ。」

と、帰依住職が子育て苦労話をし始め、

「そういえば、保育園落ちた日本死ね！って言った馬鹿な母親がいたわねえ。」

と龍笛さんが言うのと、

「日本のために死ぬる子供を育てるのが母親の役割であって、そんな馬鹿な親はこの国のためにも生かしておいてはならないわね。！」

「どうせだらしな母親に決まっているー！」

と、ほおでえ看護師と帰任職は言ったが、そのだらしない母親が同じ列車に乗っていて、既に今朝始末されたことは知るよしもなかった。

いつの間にかこちらのテーブルは子育て談議に花が咲き、このテーブル周辺は国防子育て会議になっていた。疲れて眠りこけたみいちゃんと夜食の中華ポテチを部屋に置いてきた麒麟児母さんも子育て会議の輪に加わっていた。

タカシ君と弟君を寝かしつけて会場に戻ってきた男前のカオリさんは、ひとつに固まっている子育て談義グループと、いくつかの少人数に分かれて盛り上がっている独身グループとに線引きされていることに気が付いた。

独身グループの方が話題が面白そうだけど、弟君を寝かしつけてくれた龍笛さんたちに挨拶せねばと、子育てグループの分科会に参加した。

Все счастливые семьи похожи друг на друга, каждая несчастливая семья несчастлива по-своему.

幸福な家庭はどれも似た様なものだが、不幸な家庭は皆それぞれに不幸である。レフ・トルストイの「アンナ・カレーニナ」の冒頭に出て来る名言である。

「奉天城にごつつ豪華な大浴場があつてん。私とマルは入つて来たけど、入浴料もいらへんかつた。なあ、マル。」

「効能ありそうな赤いお湯やつたなあ。湯ざめせえへんねん。」

「お肌ツルツルのピカピカやねん。」

独身女性たちの集まりではかおり姫とマルさんが数時間前に入浴してきた奉天城の大浴場の話題で持ちきりになっていた。一声かけてくれればよかったのにと皆思っていた。

「そんでなあ。風呂にけつたいなねえちゃんがおつてん。」

「私たちがお風呂に入っている間、薄暗い洗い場でずっと髪を洗ってはつたなあ。」

「そうやねん。大浴場にいたのは私とマルにそのねえちゃんだけやったけど、ずうっと髪を洗つただけで、一度も湯船にけえへんかつたな。」

「中島みゆきの唄みたいやなあ。ヤギの匂いを流すためかな？」

煙草のにおいを流すため 男の香りを流すため あいつの全てを流すため いつまでいつまで 飽きもせず 女が髪を洗います。

中島みゆきが「髪を洗う女」を謳うのは何十年も後のことであった。

「それって、一年中髪を洗っている人じゃないの？」

菊宗政監督が冷ややかに言った。

「一年中髪を洗っているって？」

「この世の人じゃないと思いますよ。」

かおり姫とマルさんは一気に湯冷めをし、話を聞いていた一同は一瞬にして凍り付いた。

「かおりい、あたしら幽霊とお風呂に入っていたの？」

「あんたの雑誌にそんな都市伝説書かれてなかったやないの！」

「だって知らなかったんだもん！」

この一角は、ニックに陥った。

菊宗政監督は、とろろん娘に演説をするときの演技指導をした。

「花があるでよお。あんた花があるで。どや、陸軍なんかやめて宝塚にけえんか？」
菊宗政監督にはまた新たな構想が思い浮かんでいた。

時は南北朝時代、京の都を追われた後醍醐天皇は奈良の吉野で南朝を打ち立てる。

後醍醐天皇ご姻戚の公家のわがまま娘、小原須賀烈都（おはらすかーれつと）の宮と、青年将校の馬虎列島（ぼとられつと）の恋と確執。やがて北朝に敗れる南朝。愛していた馬虎列島にも去られ、風邪をひいて難聴になった我儘お公家の小原須賀烈都は鱈の鍋を食べながら「明日はあたしの風が吹く！」と、又ヒヒと笑うのであった。

題名は？題名は「風邪と共に去りぬ」にしよう！

馬虎列島はあの男装の令嬢にやらせよう！そして小原須賀烈都は我儘娘とは真逆のこの素朴な娘に演じさせてみよう！「辺留祭湯の原」に続く第二弾「風邪と共に去りぬ」はこうして生まれたのであった。

菊宗政監督の円卓ではサツちゃんがテーブルに突っ伏していた。

「どないしたんや？酔っ払ったんか？」

菊宗政監督が声をかけると

「私とんでもない過ちをしてしまったの。コミンテルンがええなあ思うたことがあつてん。」

サツちゃん暴露に「私も」と同意する女性が何人もいた。

女性に参政権もない時代だったが、当時は世界的にまだそういう風潮だったのだ。

とろろん娘は「コミンテルンは大嫌いだ、女性の参政権は得なければならぬ」と思った。

コミンテルンのやり方はいつも同じで、人様が望んでいることに巧みに便乗して利用し、憑依することで、自分が安全な立場に付いたら利用してきた者たちを「排除」し、最後は骨肉の内部闘争になる。日本共産党だつて宮本顕治がリンチ事件でスパイ容疑をかけた小畑達夫を殺害し網走刑務所に送られている。

ちなみに宮本顕治は山口県の出身だが愛媛の松山高等学校から東京帝大に進学した。

宮本に殺された小畑達夫は秋田の大館の出身で、小畑の母親は音楽学校に通う朝鮮人の面倒を見て育て上げた。流行歌手の小畑実である。

サツちゃんのカミングアウトで、コミンテルンに引き込まれそうになった経験がある人たちが次々と名乗り出た。

宝塚には誘われてもコミンテルンには誘われないうとろろん娘は、大きめの皿に料理を盛りつけて客室で試験勉強をしている武尊君に持って行った。

廊下を歩いて行くと汚い言葉で罵り合う女の声があった。どうやら酔っ払って喧嘩でもしているのだろうと素通りして龍笛家の部屋に向かうとろろん娘だった。

言い争いをしていたのはコミンテルンのチバーバと小宮山だった。マチ姐さんが仕掛けた悪口分断作戦が見事に功を奏し、お互いが排除し合うことで名をあげる功名心にうまく火がついたのであった。

その夜、チバーバたちは互いに相手が寝ているのを確かめて、相手の飲み物にフグの毒を混

入させた。

二人の遺体が発見されたのは翌日で、一行が立ち去った後だった。フグの毒は「附子（ブス）」と呼ぶが、服毒死した死に顔があまりにひどいため、服毒しなくても天然でそういう顔をされている方にもブスと言う敬称が用いられるようになった。

龍笛家の部屋では武尊君が腕立て伏せをしながら因数分解の問題を解いていた。どうやらアンニンに教わった勉強法らしい。武闘派の武尊君にはこの勉強法が適合してみたいで、筋肉に学問を刻み込んで行ったのが、お腹周りに知識を蓄えたアンニンとの違いだった。

「わしは子作りには参加したが子育てには参加しとらん！」
おかげで舞子売中佐の子供たちは評判の良い優等生だった。

男性たちはホテルを出て少し離れたビルに入り、慰霊祭を執り行うこととなった。烏帽子をかぶり神事の衣装に身を包んだショウ・チャンツーがタンバリンを持って待っていた。

こうして奉天六区座において厳かなる神事が開催された。

「わしのおごりじゃ！脱いでくれ！踊ってくれ！」

舞子売中佐の檄と共に巫女さんたちが次々と登場して観音様信仰の儀式は始まった。ちなみに予算は？支出理由を問われない官房機密費から出たのであろう。

フルカワ先生と宵宵先生それに上方から来た説博士は歌舞伎や能の土蜘蛛のように、投げると広がるリボンの扱い方をショウ・チャンツーから教わった。

「ご希望の方はスターキーさんがコンタックスのカメラで観音様と一緒に写真を撮影してください。カール・ツァイスのレンズで写す観音様は絶品であった。」

更に、写真撮影で納めてもらったお布施は交通遺児に寄付される社会事業なので、世のため人のために行われた尊い写真撮影でもあった。

武術オタのアンニンは龍笛ハズバンドの腕を撫でながら

「立ち技系武術の素晴らしい体を作り上げましたね。」とまじまじ眺めるので、「こいつ両刀使いか？」と警戒する龍笛ハズバンドであった。

潜水服姿の富井は足につけたフィンが邪魔してなかなか舞台のかぶりつきに移動できず、やきもきしていた。舞台の端からでは水中メガネが視界を遮るために見えず、しかも、見えそうなきになると赤井五平が麻雀牌の萬子（マンズ）を視線の先に出して邪魔をした。

「まったく大阪もんはえげつないでえ。」

と、ぼやく富井潜水夫であった。

大阪もんは……………。

かおり姫の田卓にデザート杏仁豆腐を持ってきたウェイターの男を見て

「あんたちよつと！」

と、かおり姫はそのウェイターの腕を捕まえた。

「そういえば、あんた以前、大阪者もんはどうのこうのって言うてはったなあ。話を聞こうやないの。ちよつとこつちいきいや。」

「あ、あれはですねえ。犯人が赤井五平と富井ではなくかおり姫だったことで、もう、

どうでもいいじゃないですか。知覧ではかおり姫のわきが甘いついていうのか。」
「ええことあるかい……ここだけの話や私にだけ教えんかい。」

かおり姫はウェイターを会場の外のバルコニーに連れ出すとウェイターの胸ぐらをつかんで問い詰めた。愉仲オタでなければわからぬ楽屋ネタである。

自分の出番はもつと後半だろうと油断して出てきたしまった秋田のネロさんだった。

鹿児島島の知覧でかおり姫が何をやらかしたかはネロさん一人の謎となっている。

「ずいぶん遅かったのね。」

龍笛ハズバンドがホテルの部屋に戻ると武尊君はすでに寝ていて、夫のために夜食用に女子会の料理の残りを皿に盛り付けて龍笛さんが待ってきた。どんな会議が行われたのか興味はあったが、国の将来に関わることだから聞かないことにしている龍笛さんだった。

「会議の後は慰霊祭が行われたんだ。」

「そう、大変なお役目お疲れ様でした。」

龍笛ハズバンドは巫女さんにもらったタンバリンをこっそり荷物にしまい込んだ。

麒麟児父さんがホテルに戻ってみるとみいちちゃんも麒麟児母さんも熟睡していた。

「飛べえ！撃てえ！ルクソール！花火い！」

毎度わけのわからぬ麒麟児かあさんの寝言に、どんな夢を見ているんだ？と腕組みをする麒麟児父さんだった。

警護に当たっていた未造技師はビルの外で「随分賑やかな慰霊祭だな」と思っていたが、葬式に爆竹鳴らす鳴り物大好き支那大陸生活が長くなっていたので、うるさい音にも慣れつこになつてしまった。

最後に建物から出てきたのは烏帽子をかぶったショウ・チャンツーとフルカワ先生、千葉の宵宵先生、説博士の学者グループだった。なぜかそこに潜水服姿の富井が加わり、大きなフィンでペタペタ歩いてた。

学者グループが観音様について話していたので、こういう人たちは「男の隠れ家 仏像の見た方」なんかを読んでいるのだろうか、大人の男のゆとりだなと想像した。

未造技師がいまだに変装した自分に気がついていないと思ったショウ・チャンツーはそばに近寄って観音様信仰の御朱印帳を見せた。

「姫、具が出ておりますぞ。」

未造技師はつぶやいた。ショウ・チャンツーは自分の変装がばれていなかったことを喜んだ。

その頃、落ち込んだサッチャーを誘って外に飲みに行った菊宗政監督は帰り道がわからなくなつてしまった。

日本の警察力を参考にあの大陸ではさぶる治安が良いと言われている奉天でも、どんな賊がいるかもしれぬ不安があった。ビルの影や小さな物音にもひやひやしながら、菊宗政監督とサッチャーは街をさまよっていた。

この際。場末のラブホでも何でもいいから見つけたら女二人で泊まるうか？と探したところ、大阪と違つて奉天にはそんなものはない。

突然、ビルの影から人影が飛び出してきて二人は驚きの悲鳴を上げた。強盗団だった。菊宗政監督とサツちゃんの運命やいかに！〜つづく〜

と、なり、次週に持ち越しかコマーションルになるのが常で、番組が始まると前回のあらすじで大量の時間を費やして製作費浮かす。姑息な手法に、結果なんか知るか！とチャンネルを回してしまう現代人。だから結果を書いておきます。

その瞬間、どこからともなく中華鍋が飛んできて賊をなぎ倒した。第二弾の中華鍋が飛んでくると、賊の一人がテコンドーの技の一つ、かかと落としで中華鍋を蹴った。が、その鍋には熱く熱したブタの油が煮えたぎっていたので、賊たちに降りかかると、「アイゴ！アイゴ！」と叫び声を上げてもたえ苦しんだ。

今だ！菊宗政監督はサツちゃんの手を引いて走り出すとホテルの玄関にたどり着いていた。

強盗現場近くでは片栗粉の入った袋を手に

「先に片栗粉を浴びせてから油をかければ肉のうまみを閉じ込め、竜田揚げができたのに。まだまだ修行をせねば。」

と中岡二世料理長が反省していた。

こうして奉天の夜は更けていくと言うより次なる夜明けが迫っていたのであった。